

訂 改 補 增

學 文 本 日  
典 辭 大

卷 六 第

士 博 學 文

編 作 村 藤

版 社 潮 新



昭和二十六年四月三十日發行  
昭和二十七年六月三十日三刷

定價 金九百五拾圓  
地方賣價 千圓

增補改訂  
日本文學大辭典  
第六卷  
著者權所有

編纂者 藤村作

發行者 佐藤義夫  
東京都新宿區矢來町七十一番地

發行所 株式會社 新潮社  
東京都新宿區矢來町七十一番地

電話九段 (33)  
振替 (東京) 八〇八番  
一四三二一  
番番番番番

印刷所 二光印刷株式會社  
東京都文京區西江戸川町二十一番地

印刷者 佐藤精亮

# 挿畫目次

瀧澤馬琴 <small>(肖像及び筆蹟)</small> .....	三
松尾芭蕉 <small>(肖像及び筆蹟)</small> .....	四
平假名諸體及び字源表(一).....	一九
平假名諸體及び字源表(二).....	一九
平假名諸體及び字源表(三).....	一九
平假名諸體及び字源表(四).....	一九
舞樂 <small>(鳥蘇利、二舞、拔頭、撥切、新)</small> .....	二〇
舞樂裝束 <small>(書厚裝、八仙)</small> .....	二〇
與謝蕪村 <small>(肖像及び筆蹟)</small> .....	二六
古河黙阿彌 <small>(肖像及び筆蹟)</small> .....	二六
平家物語(一) <small>(平假名整版本、十一行平假名古活字本、十二行片假名古活字本、葉字七行本)</small> .....	三四八
平家物語(二) <small>(大村伯符家藏藏覺一別本、永正十八年書寫四部合戰狀本、中ノ院本、原代本)</small> .....	三四八
平家物語(三) <small>(百二十句本、延慶本、前田流、語本平家正節、波多野流註本)</small> .....	三四八
平治物語 <small>(松井本、嵯峨本、元和古活字本)</small> .....	三五
方言 <small>(大日本方言、區劃圖)</small> .....	三五
方言 <small>(が行鼻音、之分布圖)</small> .....	三五

方 <small>言(拂つた、拂ち)等の分布圖</small> .....	三五
保元物語 <small>(京師本、楠本、平假名古活字本)</small> .....	三七
梵 <small>字(一)(アラフミ文字、鹽曆文)</small> .....	四三
梵 <small>字(二)(悉曇文字)</small> .....	四三
梵 <small>字(三)(悉曇文字)</small> .....	四三
枕草子古寫本 <small>(館因本、堺本、前田家本)</small> .....	四四
枕草子繪卷.....	四四
賀茂眞淵 <small>(肖像及び筆蹟)</small> .....	四八

# 増補改訂 日本文學大辭典 第六卷

## は

### 俳諧叢書

【刊行】明治三十二年から同四十二年に至る。發行所は初めホトギス發行所。後、俳書堂。外に同名の叢書がある。【解説】明治の新派俳句興隆期に際して、雜誌「ホトギス」(別項)の刊行と共に、輕便な叢書の形で上梓され、同派の普及運動に力となつたものである。縱約十五五種、横十一種、定價二十錢乃至二十五錢位の袖珍本であり、當初、巻頭に「俳諧叢書は毎月一冊を以て發行し一年十二冊を以て完結す一俳諧叢書は俳諧に關する同人の著書を刊行す一俳諧叢書は時に有用と認むるの俳書を齎刻すと謳つた。俳諧大要(は子規の俳句觀の最も直截に窺ひ得るもの、「俳人蕪村」は子規が蕪村に對する傾倒を吐露した歴史的文章である。「俳句問答」は第一篇俳句問答第二篇試問(上之巻)第三篇或問第四篇隨問隨答(下之巻)より成り、「疑問又疑問、嘲弄又嘲弄、願はくは吾道の誤れるか否かを試みん」といふ如く、子規が革新運動に對する質疑論難を受けて自ら懇切丁寧に之に答へたもの。「俳句界四年間」は明治二十九年から三十二年に至る四

年間の俳句界の評論で、子規一門の年次の進展を知るべきもの、附録に鳴雪、瓢亭、碧梧桐、盧子の句がある。「老梅居俳句問答」は内藤鳴雪の俳句觀を知るべきものである。「春夏秋冬」續春夏秋冬の二種は、子規一門に於ける代表的の選集で、この前に「新俳句」、この後に「日本俳句鈔」と續けて通覽すれば、明治年間に於ける俳句の年次の變遷を明かにし得よう。「新春夏秋冬」は編者の句作標準によつて元祿天明時代の句を抜抄したものである。「俳諧三佳書」は「猿蓑」と「續明鶴」「五車反古」とを合編したもので、「浪化涼菟句集」及び「太紙全集」「几重句集」「召波精良句集」とともに、子規の晩年に於けるその一門の古俳句關心の方向を窺ひ得るものである。叢書は次の二十八篇である。

【第一篇】俳諧大要(正岡子規著) 【第二篇】俳人蕪村(子規著) 【第三篇】俳諧三佳書(高濱虛子著) 【第四篇】蕪村全集(盧子編) 【第五篇】几重句集(盧子編) 【第六篇】召波精良句集(盧子編) 【第七篇】春夏秋冬(盧子編) 【第八篇】十篇春夏秋冬(盧子編) 【第九篇】子規問答(子規著) 【第十篇】子規問答(下之巻) 【第十一篇】子規問答(上之巻) 【第十二篇】子規問答(中之巻) 【第十三篇】子規問答(下之巻) 【第十四篇】浪化涼菟句集(河東碧梧桐著) 【第十五篇】十八篇續春夏秋冬(碧梧桐著) 【第十六篇】二十篇老梅居俳句問答上下(内藤鳴雪著) 【第十七篇】二十四篇新春夏秋冬(松根東洋城選) 【第十八篇】二十五篇二十八篇故

人春夏秋冬(大須賀玄字編) 【荻原】  
俳諧叢書(は) 七册【編者】佐々醒雪、巖谷小波【刊行】大正元年から大正五年に至る。博文館【解説】博文館の開業二十五周年記念出版として企圖された叢書中の一つで、大體から云へば、元祿時代を中心とした蕪風の俳書類及びその末書の複刻類聚である。連歌師の紀行が二三八つてゐたり、天明前後の作者の作もあるにはあるが、それは附けたりと云ふ程である。そして前に同じ版元から出版された「俳諧文庫」(別項)と重複したものもあるが、元祿蕪風俳諧の註釋書類を加へたが如きは、初學者に便益するところが多からう。所収の俳書は次の如きものである。  
【第一篇】俳諧註釋集(上巻) 【第二篇】芭蕉翁發句評林集(杉雨) 【第三篇】發句西堀(梅丸) 【第四篇】朱鷺(五山) 【第五篇】七部集(大鏡) 【第六篇】七部要心錄(曲齋)及び附録、元祿蕪風(佐々醒雪) 【第七篇】俳諧註釋集(下巻) 【第八篇】要心錄(續) 【第九篇】發句拙撰(莊丹) 【第十篇】發句拙撰(莊丹) 【第十一篇】俳諧(みま) 【第十二篇】風雲發句拙撰(莊丹) 【第十三篇】俳諧(雀志) 【第十四篇】俳諧十論(發家) 【第十五篇】俳諧古今抄(支考) 【第十六篇】芭蕉翁附合集評註(石分) 【第十七篇】七部(更定) 【第十八篇】去來抄(去來) 【第十九篇】名家俳句集(附合集) 【第二十篇】延寶廿歌仙(芭蕉門弟) 【第二十一篇】拾遺(寛治) 【第二十二篇】俳諧古選(嘯山) 【第二十三篇】新選(嘯山) 【第二十四篇】俳諧(松野) 【第二十五篇】松野(松野) 【第二十六篇】松野(松野) 【第二十七篇】松野(松野) 【第二十八篇】松野(松野) 【第二十九篇】松野(松野) 【第三十篇】松野(松野) 【第三十一篇】松野(松野) 【第三十二篇】松野(松野) 【第三十三篇】松野(松野) 【第三十四篇】松野(松野) 【第三十五篇】松野(松野) 【第三十六篇】松野(松野) 【第三十七篇】松野(松野) 【第三十八篇】松野(松野) 【第三十九篇】松野(松野) 【第四十篇】松野(松野) 【第四十一篇】松野(松野) 【第四十二篇】松野(松野) 【第四十三篇】松野(松野) 【第四十四篇】松野(松野) 【第四十五篇】松野(松野) 【第四十六篇】松野(松野) 【第四十七篇】松野(松野) 【第四十八篇】松野(松野) 【第四十九篇】松野(松野) 【第五十篇】松野(松野) 【第五十一篇】松野(松野) 【第五十二篇】松野(松野) 【第五十三篇】松野(松野) 【第五十四篇】松野(松野) 【第五十五篇】松野(松野) 【第五十六篇】松野(松野) 【第五十七篇】松野(松野) 【第五十八篇】松野(松野) 【第五十九篇】松野(松野) 【第六十篇】松野(松野) 【第六十一篇】松野(松野) 【第六十二篇】松野(松野) 【第六十三篇】松野(松野) 【第六十四篇】松野(松野) 【第六十五篇】松野(松野) 【第六十六篇】松野(松野) 【第六十七篇】松野(松野) 【第六十八篇】松野(松野) 【第六十九篇】松野(松野) 【第七十篇】松野(松野) 【第七十一篇】松野(松野) 【第七十二篇】松野(松野) 【第七十三篇】松野(松野) 【第七十四篇】松野(松野) 【第七十五篇】松野(松野) 【第七十六篇】松野(松野) 【第七十七篇】松野(松野) 【第七十八篇】松野(松野) 【第七十九篇】松野(松野) 【第八十篇】松野(松野) 【第八十一篇】松野(松野) 【第八十二篇】松野(松野) 【第八十三篇】松野(松野) 【第八十四篇】松野(松野) 【第八十五篇】松野(松野) 【第八十六篇】松野(松野) 【第八十七篇】松野(松野) 【第八十八篇】松野(松野) 【第八十九篇】松野(松野) 【第九十篇】松野(松野) 【第九十一篇】松野(松野) 【第九十二篇】松野(松野) 【第九十三篇】松野(松野) 【第九十四篇】松野(松野) 【第九十五篇】松野(松野) 【第九十六篇】松野(松野) 【第九十七篇】松野(松野) 【第九十八篇】松野(松野) 【第九十九篇】松野(松野) 【第一百篇】松野(松野)

【解説】「俳諧大要」は子規の俳句觀の最も直截に窺ひ得るもの、「俳人蕪村」は子規が蕪村に對する傾倒を吐露した歴史的文章である。「俳句問答」は第一篇俳句問答第二篇試問(上之巻)第三篇或問第四篇隨問隨答(下之巻)より成り、「疑問又疑問、嘲弄又嘲弄、願はくは吾道の誤れるか否かを試みん」といふ如く、子規が革新運動に對する質疑論難を受けて自ら懇切丁寧に之に答へたもの。「俳句界四年間」は明治二十九年から三十二年に至る四

年間の俳句界の評論で、子規一門の年次の進展を知るべきもの、附録に鳴雪、瓢亭、碧梧桐、盧子の句がある。「老梅居俳句問答」は内藤鳴雪の俳句觀を知るべきものである。「春夏秋冬」續春夏秋冬の二種は、子規一門に於ける代表的の選集で、この前に「新俳句」、この後に「日本俳句鈔」と續けて通覽すれば、明治年間に於ける俳句の年次の變遷を明かにし得よう。「新春夏秋冬」は編者の句作標準によつて元祿天明時代の句を抜抄したものである。「俳諧三佳書」は「猿蓑」と「續明鶴」「五車反古」とを合編したもので、「浪化涼菟句集」及び「太紙全集」「几重句集」「召波精良句集」とともに、子規の晩年に於けるその一門の古俳句關心の方向を窺ひ得るものである。叢書は次の二十八篇である。

【第一篇】俳諧大要(正岡子規著) 【第二篇】俳人蕪村(子規著) 【第三篇】俳諧三佳書(高濱虛子著) 【第四篇】蕪村全集(盧子編) 【第五篇】几重句集(盧子編) 【第六篇】召波精良句集(盧子編) 【第七篇】春夏秋冬(盧子編) 【第八篇】十篇春夏秋冬(盧子編) 【第九篇】子規問答(子規著) 【第十篇】子規問答(下之巻) 【第十一篇】子規問答(上之巻) 【第十二篇】子規問答(中之巻) 【第十三篇】子規問答(下之巻) 【第十四篇】浪化涼菟句集(河東碧梧桐著) 【第十五篇】十八篇續春夏秋冬(碧梧桐著) 【第十六篇】二十篇老梅居俳句問答上下(内藤鳴雪著) 【第十七篇】二十四篇新春夏秋冬(松根東洋城選) 【第十八篇】二十五篇二十八篇故

【荻原】  
俳諧大要(は) 一册【著者】正岡子規【成立】明治二十八年秋【刊行】明治三十二年一月、ホトギス發行所。【解説】子規が明治二十八年に、日清戦争の

從軍記者として出發し、病を得て歸り、病後故郷松山に歸養中に成つたもので、當地の松風會諸子のために説いたものである。全篇が俳句の標準、俳句と他の文學、俳句の種類、俳句と四季、修學第一期、修學第二期、修學第三期、俳諧連歌の八章に分たれてゐる。俳諧大要と名づけたのは、最後の一章に連句について説き、子規が當時の新知識によつて、從來の所説に提はれず、自由な創見的に、俳句に對する一般の理論と俳句修學の過程及び作法とを説いたものである。ただ最後の俳諧連歌に於ては、連句の法則を説き、その運用を知らしめるため、「五車反古」(別項)中の半歌仙冬籠の巻を解説してゐる。明治の日本派俳人の俳句作法書では、盧子の「俳句入門」(別項)が明治三十一年に出たもので、本書は實はその前に成つたものであるから、新派俳人著の作法書の嚆矢で、同時に子規の俳句觀を窺はしめるものである。(志田)

**俳諧高天鷲** はいかいこうてんじゆ 雜俳書 一冊  
【別名】俳諧まめ男 はいかいまめおとこ 【著者】鶴壽軒良弘(大和國葛城山麓に産を結んで閑居した人)【刊行】元祿九年【諸本】徳川文藝類聚雜俳第十一所収【解説】その自序に、我が住所の邊にある高天寺の名鳥たる鶯の名を取りて、かくは名づけたと記してゐる。京阪地方前句附の歴史等を知らぬに、これに對する著者の講説、雜談を以て自序に會席を立て、會終つて後、會者が質疑をなし、それに對する著者の講説、雜談を

**俳諧棚搜** はいかいたなご 俳論 一冊【著者】大島蓼太【成立】明和三年二月【刊行】不明【諸本】雪門報恩集、蓼太全集、俳諧文庫所収【由来】著者の門弟愚得房鼠腹は、毎月八の日を以て自序に會席を立て、會終つて後、會者が質疑をなし、それに對する著者の講説、雜談を

聽くを例とした。本書はその寶曆十四年正月八日より、翌々明和三年二月八日(この間無會或は蓼太不參のこともあつた)に至る間の講説、雜談を問答の儘に筆記し、鼠腹が上木したものである。【解説】蕉風俳諧の根本的な問題や句作又は附合等に關し、多くは具體的な作に關して著者の解釋及び意見述べたものである。その説く所は、其角・支考等の俳論を祖述する態度を取つたもので、俳諧の新古の事、趣向を立てる法、指合・季立の事、修行之事、風委風情の事、その他諸種の問題を取扱つてゐる。著者の創見として見るべきものは殆どないが、力めて蕉風の面目を表はさうとしてゐる。【附説】本書は、門弟四世雪中庵完來によつて再訂され、「十三條」(花簞笥)「別項」と共に「雪門報恩集」に加へられてゐる。(各務)

**俳家逸話** はいけあいつわ 傳記 正續二篇【編者】安藤和風【刊行】明治三十九年五月【解説】正篇に百四十九項、續篇に二百二十三項を収む。この書の特徴とするところは、成書たる「俳家奇人談」「蕉門頭陀物語」「近世奇人傳」「二葉集」「俳人百家撰」「歌俳百人選」等から抄出することを避け、専ら斷簡零語や、故老の談話や、編者の見聞を輯録した點にあつて、上は至尊より下は僕隷に至る今古の俳人数百家に互つてゐる。事實の正否に就いては編者自ら精査なる考證を経たりと云ふにあらず、傳聞の誤り固より保せずと記してゐる通り、或は信すべく或は信すべからざるものもあるが、兎に角新資料に據る事と比較的正確を期する事とを主眼としたもので、俳人の傳記的研究に資する所が少くない。巻頭に、湖南宙外・天外等の序がある。(白出)

**俳諧手引種** はいかいてびやく 俳諧作法 二冊【著者】谷素外【刊行】文化四年【諸本】付合作法全集、俳諧文庫に下巻のみを収む。【由来】門人一鳥井透瀨の後記に依ると、本書は初學道に入るに便するため、透瀨等の懇望するに任せて書かれたものとある。【解説】望の立て方及び附合の附方案じ方を説明したものである。上巻には、先づ發句の一般的な考察を述べ、發句の案じ方、發句の體、平素心掛くべきことを初めとして、神祇・釋教・離別・禪旅名所舊蹟・戀・哀傷・挽歌・追悼・追善・懷舊・述懷・贈答・書讀・題詠・物名・祝等の句の法を説き、切字の事を解説するなど、専ら發句に關する作法を述べ、神祇以下の句法の實例として一派の發句百數十句を附録し、下巻には、先づ附句の一般論を掲げ、進んで脇第三、以下表八句の附方案じ方を述べ、親句・疎句の附方・四手附・取成附・四道の附方・七名八體の事等、連句作法に關して極めて懇切に初心者導き、最後に俳諧諸派を品評して、一派に偏せず、他流にも交はるべきことを教へ、四道の附方による附句の作例を附録してゐる。これ等の解説は、極めて平易通俗で、全く標題にいふ手引種の名に背かぬものである。

**俳諧小傳** はいかいせつでん 素外は本姓池田氏、大阪の人、江戸神田お玉が池の邊りに住む。一陽井・玉池・三化と號した。江戸談林七世の宗師。初め建部涼侍門、後小菅若狐門。文政六年二月八日歿す。享年九十。「玉池雜藻」「誹諧根源集」「梅翁宗因發句集」、その他著書頗る多い。(各務)  
**俳諧天狗問答** はいかいてんぐもんたう 俳話 二冊【著者】大島蓼太(鼠足の序には、「はじめ作ける人も知らず」とあるが、これは假託である)【刊

行】安永三年秋【由来】序に、「御伽婢子の寓言ながら」とある如く、寓言として俳壇の天狗連を諷したもので、門弟雪椿亭鼠腹が「二百章の附句はわけまよふ麓のみのちのしをり草にも」と安永癸巳(二年)秋、序を附して出版したものである。【諸本】蓼太全集(俳諧文庫)。俳文學大系作法篇に所収。【解説】隠士宇達なる者が魔界の奇異を談する話を本體とし、これに一派の歌仙・發句を附載したものである。魔界の奇談とは、即ち武藏國田川のほとりに住み、俳諧に慢心を起してゐる宇達が、九月十三夜、連中と句談をなす折柄、夢幻の間に山城喜撰が獄の天狗六尺坊にさらはれ、怪しき天界をよきつて喜撰が獄に伴はれ、山崎宗鑑の後身たる山主に、汝をとらへ俳諧の厚薄をこゝろみ罪の輕重を糾すなり」と云はれ、六尺坊を相手として一句に對する百句の附句の運速を競はせられ、宇達は低頭懺悔して人界へ歸してくれと頼み、一句に對する神祇釋教、戀、無常の附句百句をさせられて漸く許され、夢幻の心地から覺めた。覺めて後この事を語り、連中の楚仁・那親・加南・羅九・是呂風都・雅遠と自己の發句で始まる八吟の、この夜の歌仙に遊んだ次第を述べたものである。この假託の事實は、本書中に述べてゐる言葉から推せられる如く、當時俳諧者流が一般に高ぶり天狗になつてゐるのを諷したものであるが、この趣向に就いては次の事が思ひつかれる。結構の様式の暗示は、涼俗の「俳仙篇」(別項)などから来てゐようし、天狗と俳諧を結びつけた趣向の根本は、本書中にも云つてゐる當時流行した天狗俳諧にあらうが、宗鑑を喜撰が獄の天狗にしたのは、其角の「雜談集」(別項)に、宗鑑が後に八幡山の天狗になつ

る人も知らずとあるが、これは假託である)【刊

る人も知らずとあるが、これは假託である)【刊

たと云ふ俗説を擧げてゐるので、それから思ひついたものであらう。又八吟歌仙の作の假作名は、假作名の頭字を右から讀み、下の字をそれに續けて左から讀むと、宇慈那加羅是風雅遊都呂九南親仁達となるから、恐らくこんな趣向なのであらう。従つて最初に隱士の名として宇達と出して置いたのは、實はかゝる趣向から出てゐる文字であつた事が知られる譯である。なほ云つて見ると、當時既に歿してゐた活々坊舊室は、別號を天狗坊といふが、或はこれなどからも暗示を得てゐるかも知れぬ。以上が本書の主要な部分で、乾の巻をなして居り、坤の巻には、風足と著者慧太との兩吟歌仙及び一派の發句二百數十句を採録してゐて、これは附録たる性質を持つものである。【價値】小説的結構として面白く讀ませつつ當時の俳壇の消息を傳へる所に、創作としての價値があると共に、一句の前句に對する附句百句の二様のものを見せられてゐるとは、著者慧太の附合の技倆を示したもので、この點に於ても本書は注意されねばならぬものである。

**俳諧二百年史**

【著者】齋藤彦舟【本名】はいかいに 俳諧史 ひやくにんし

【刊行】明治四十四年、陸文館。【内容】俳諧といふも、俳句を主としての觀察で、先づ元祿の巻を一冊とし、次いで天明の巻が著はされる管であつて遂に出でずに終つた。この元祿の巻には、貞徳風・檀林風の消長より蕉風の勃興を叙し、芭蕉一門の作品として「冬の日」「春の日」「噴野」「炭俵」を以て、その俳風の推移の跡を指摘し、芭蕉の門下には、荷亭野水・越人・柱國・去來・凡兆・野坡・曾良・路通・丈草・乙州・嵐岡・許六・其角・風雪・支考に就いて、殊に委しく評傳してある。又蕉風に對する鬼貫を説論して伊丹連衆に及び、芭蕉の歿後、江戸座の流行、伊勢風の地方的勢力を記述して筆を止めてある。又近松と俳諧との關係にも一視線を投じてある。【價値】後冊が續かぬために、標題と内容とはそぐはないけれども「元祿俳諧史」と題して見ると、俳句史二百年中に於ても、その黄金時代たる芭蕉時代を叙述して、繁に過ぎず簡に流れず、殊に人物中心に見てゐるので、史觀としてもいきいきとしたものが出てゐる。【跋原】

**俳諧女歌仙**

【編者】井原西鶴【名稱】傳本は題簽を逸してゐるが、小林文七菴藏本には「古今俳諧女歌仙」が入るといふ標題があつたといふ。【刊行】貞享元年、子曆孟冬下旬大阪南本町堺筋河内屋市右衛門板。再摺の刊記は、「正徳五、子曆九月吉日伊丹屋新七」とある。【解説】本書は西鶴の自筆自畫の刻本であつて、大本二十丁ある。開巻、難波俳林西鶴と署し、鶴永の印を押した彼一流の序文があつて、俳諧は和歌の押しで、女のいやしからぬすさみなること等を説き、「和朝の風俗なれば、此道に入ると、いまだ手習する娘に見せける」と結んでゐる。女歌仙の名を連ぬるものは、光貞妻・蝶翠・葉雨・津宇・満女・初女・捨女・孝女・辨女・好女・榮春・一直妻・入子娘・松安妻・虎女・里女・方女・永覺・林女・藤女・輝貞母・正治妻・勝女・傳女・金女・雪女・正由娘・久女・六女・花鳥夕霧吉田・吉野・竹女・妙庵で、それら委繪を描き、右の上とその略稱・俳歴ともいふべきものを書き、左の上にその俳句を掲げてゐる。全國的に俳諧に名ある女作者を集めたのであるが、貴族階級の者、武士の娘もあるが、多く平民階級の者、殊に遊女も交つて西鶴の浮世草子に通ずる趣味が見られる。その長崎丸山の遊女花鳥、大阪新町の遊女夕霧、江戸吉原の遊女吉田、京三筋町の遊女吉野は彼の好色本に理想的な遊女として描かれてゐるものである。なほ同じく西鶴自筆刻本の俳諧に名ある男作者

たといふも、俳句を主としての觀察で、先づ元祿の巻を一冊とし、次いで天明の巻が著はされる管であつて遂に出でずに終つた。この元祿の巻には、貞徳風・檀林風の消長より蕉風の勃興を叙し、芭蕉一門の作品として「冬の日」「春の日」「噴野」「炭俵」を以て、その俳風の推移の跡を指摘し、芭蕉の門下には、荷亭野水・越人・柱國・去來・凡兆・野坡・曾良・路通・丈草・乙州・嵐岡・許六・其角・風雪・支考に就いて、殊に委しく評傳してある。又蕉風に對する鬼貫を説論して伊丹連衆に及び、芭蕉の歿後、江戸座の流行、伊勢風の地方的勢力を記述して筆を止めてある。又近松と俳諧との關係にも一視線を投じてある。【價値】後冊が續かぬために、標題と内容とはそぐはないけれども「元祿俳諧史」と題して見ると、俳句史二百年中に於ても、その黄金時代たる芭蕉時代を叙述して、繁に過ぎず簡に流れず、殊に人物中心に見てゐるので、史觀としてもいきいきとしたものが出てゐる。【跋原】

【編者】井原西鶴【名稱】傳本は題簽を逸してゐるが、小林文七菴藏本には「古今俳諧女歌仙」が入るといふ標題があつたといふ。【刊行】貞享元年、子曆孟冬下旬大阪南本町堺筋河内屋市右衛門板。再摺の刊記は、「正徳五、子曆九月吉日伊丹屋新七」とある。【解説】本書は西鶴の自筆自畫の刻本であつて、大本二十丁ある。開巻、難波俳林西鶴と署し、鶴永の印を押した彼一流の序文があつて、俳諧は和歌の押しで、女のいやしからぬすさみなること等を説き、「和朝の風俗なれば、此道に入ると、いまだ手習する娘に見せける」と結んでゐる。女歌仙の名を連ぬるものは、光貞妻・蝶翠・葉雨・津宇・満女・初女・捨女・孝女・辨女・好女・榮春・一直妻・入子娘・松安妻・虎女・里女・方女・永覺・林女・藤女・輝貞母・正治妻・勝女・傳女・金女・雪女・正由娘・久女・六女・花鳥夕霧吉田・吉野・竹女・妙庵で、それら委繪を描き、右の上とその略稱・俳歴ともいふべきものを書き、左の上にその俳句を掲げてゐる。全國的に俳諧に名ある女作者を集めたのであるが、貴族階級の者、武士の娘もあるが、多く平民階級の者、殊に遊女も交つて西鶴の浮世草子に通ずる趣味が見られる。その長崎丸山の遊女花鳥、大阪新町の遊女夕霧、江戸吉原の遊女吉田、京三筋町の遊女吉野は彼の好色本に理想的な遊女として描かれてゐるものである。なほ同じく西鶴自筆刻本の俳諧に名ある男作者

の者、殊に遊女も交つて西鶴の浮世草子に通ずる趣味が見られる。その長崎丸山の遊女花鳥、大阪新町の遊女夕霧、江戸吉原の遊女吉田、京三筋町の遊女吉野は彼の好色本に理想的な遊女として描かれてゐるものである。なほ同じく西鶴自筆刻本の俳諧に名ある男作者



（減氏堅野笹）仙歌女諧俳

四十二年十一月、吉川弘文館。【解説】本書は慶長三年松永貞徳が俳諧宗匠を免許されしより明治四十年に至る三百有餘年間に於ける俳界の事蹟、俳人の生歿、俳書の刊行等を編年體に編述したものである。書中を分けて四段とし、一段には紀年、二段には俳壇及び俳人の事蹟、三段には生歿享年、四段には俳書の刊行を記載してある。巻頭には歿年索引が附してある。同じ編者人が、明治三十四年に星野麥人と共著、同じ竹冷の校閲で、「俳諧年表」(別項)を著はしてゐるので、本書は更にそれを簡約し、編述の體裁を變へて分段式とし、かなり訂正も行ひ、簡単な俳諧年表として役立てたものである。

**俳諧年表**

【著者】はいかいに 牧野東、星野麥人共著。角田竹冷校

【刊行】明治三十四年十月、博文館。【解説】延徳元年山崎宗鑑が武門を去る頃から、明治三十四年十月に至る四百十三年間に於ける俳

を集めた天和元年刊行の「難波色紙百人一句」と姉妹篇をたすものとして、興味の深いものである。【参考】西鶴の眼に映したる夕霧並に其委繪水谷不倒歌集(研究第十編)【笹野】

人の生時、各俳人の傳記の概略、主要な俳諧事項、刊行俳書を編年體に排列した年表である。歿年の不明な俳人は一切除き、歿年に諸説あるものは眞に近しと思はれる年時の所に掲げ、異説は括弧中に収めてある。又俳諧の起原、沿革等を知らしめる便から、連歌師及び連歌書をも掲げてあるが、俳諧が漸く盛んに

至る頃を以て停止してある。巻首には、参考書目の外、人名索引を附して検出に便じてある。明治時代に於ける俳諧年表には、これより先、三十年に刊行された俳諧文庫第二編芭蕉以前俳諧集(大野酒竹編)上巻巻頭の酒竹の編にかゝる「俳諧年表」があるが、同年表に比べては、すべてに互つて増加されてゐる點が勝れてゐる。併し歿年不明の俳人を收むべき方法を講じなかつたことは惜しむべき缺陷であり、なほ史實の研究の不十分であつた時代の關係上、今日からは改訂するべき點も少くない。

【附記】隨流の談林攻撃がいたく俳壇を沸騰

【附記】隨流の談林攻撃がいたく俳壇を沸騰させ、當の相手の高政自身は、これに對して何等の返答をもしなかつたけれども、岡西惟中(別項)が先づ街津的な筆法を以て「誹諧破邪顯正返答(延寶八年刊)」を著し、高政に就いては隨流の非難を是として、却つて高政を難じ、師宗因を辯護した。これに對して重頼が「誹諧熊坂」を著して、誹曲の熊坂もちりて談林を論駁したらしく傳本不詳、これに應じて、當時高政派となつてゐた青木春澄が、同じ誹曲の賴政もちりの「誹諧賴政」を著して、本書及び「誹諧熊坂」の兩書に返答反駁した。これ等と同時に、或は續いて「誹諧熊坂」の返答書の「誹諧源氏供養」や、同じく談林派の著らしい「あつかひ草」(以上二書傳本不詳)や歌人金勝慶安の著と傳へられ、高政と隨流との訴狀に擬した趣向を立て、「中庸姿」を批判しながら中立の態度を取つた二つ歪などが現はれ、又談林派の著ながら却つて惟中の「誹諧破邪顯正返答」に附した獨吟百韻を非難した「行事板」が現はれた。惟中は直ちにこれに應じて、「俳諧破評判之返答百韻」を著して、自ら獨吟百韻に註解を附すると共に、「行事板」を反駁した。隨流は暫く沈黙を守つて形勢を見てゐたらしいが、以上の書などの出たのを見ずまして、隨流の門人の瀧川隨有が「誹諧猿轡」を著して、惟中の「誹諧破邪顯正返答」に附した獨吟百韻を攻撃したのである。これに續いて、「破邪顯正並にその返答の評判」と名乗つて、中立の立場に立ちながら實は貞門に有利な論をなした「俳諧殺巻」が現はれた。以上本書の現はれた延寶七年十二月から翌八年四月頃までの間に、上述のやうな論争書が續々と現はれ、或は隨流乃至貞門を擁護し、或は惟中乃至談林を是認し、或は第三者の地

位に立つて兩者を批判するなど、中宇巴の白熱化した論争が行はれたのであるが、多くは攻撃のための攻撃となり、人身攻撃の醜惡な言辭の弄せられることが多く、俳諧論究の學理的な言説は比較的少いものとして了つたのである。(中庸姿参照)

【參考】俳諧詞戰史(原田退藏、俳諧史の研究)○貞門談林の論争と俳論同上(俳句講座俳諧文)

【俳諧芭蕉談】(志田・稔原)

【編者】僧文曉【名稱】文曉の跋に、「無外簽、且編首無書名」とあり、「私題爲芭蕉談」とある如く、書名は文曉の附したものであり、また「多芭蕉翁所與諸門人論辨答述」とある如く、かゝる點から俳諧芭蕉談としたものと思はれる。【刊行】享和二年【諸本】享和二年菊屋大兵衛板のものは、栗本玉層の序がある。後この序を除き、近江の美松山人亞溪の序を附した後刷があるといふ。また黒田源次編「芭蕉翁傳」の一部としても收められてゐる。【由来】玉層の序及び自跋によれば、文曉が明和二年長崎に遊び、外尾氏から本書の稿本を得たが、卯七の記したものであつた。後、篋中に秘すること数十年、享和二年に至りて京に出で、薩の關叟と謀り、書肆菊翁をして上梓せしめたのであるといふ。

【辨説】俳諧俳文俳諧集等に關する雑多な談話論評等で、その中に開書や書簡が混じて居り、全體の中、去來と卯七との問答及び去來の談が多きを占め、特に乾の巻に於てさうである。然るに乾の巻の條々には、去來の「花實集」乾巻と同一本源と思はれる條が十三條もあつて、そのうち「花實集」の方には其角曰とあるものが去來曰となつてゐるものや、「花實

集」には、其角曰で始まつてゐるものが省かれてゐるものや、「花實集」には其角の間であるものが魯町となつてゐたり、關國曰であるものが魯町となつてゐたりしてゐて、かく人物の變異してゐる條が六條もあるのである。これは同一本源のものが二様に傳へられたものと考へられぬではないが、又一方が一方を改竄したものとも考へ得、改竄したものとするれば、「花實集」の性質から考へて本書の方が改竄したものかと考へねばならぬのである。然るに又、本書乾の巻の條々の中、寫本「去來抄」の故實篇の條々と殆ど一致するものが十二條あつて、且つこれ等の大部分のものが「花實集」とほぼ一致する前述の條々と同一のものである。若し本書の條々が「花實集」を改竄したものであるならば、この點から云つて、寫本「去來抄」故實篇の條々が、本書と同様に「花實集」を改竄したものといふことになる。然るに本書乾の巻の冒頭には「故實」と標記して、その註記の如き形で、「予初學の時より」で始まつて、「此節は先師の物語有し事ども僅に覺へ待るを記す」と結んだ文があつて、この文の様子では去來の自記の如く見做され、従つて本書乾の巻と寫本「去來抄」故實篇とは同一本源のものであるべきことも推せられる。なほ本書乾の巻には、「旅茶圖の佛を引く條が三條ある。又本書中の巻でふと、頗る長文の正條の送納中に、鬼貫の幻住庵訪問を云ひ、而もそれが鬼貫の机上の假託旅行記たる(然足旅記)を、眞の旅行と誤りて述べてゐるものや、曲齋が既に數々の虚偽の證を擧げて偽文説を出してゐるのであるが、その他にあつても、去來が「續猿轡」を元祿七年に芭蕉着手のもの

【附記】隨流の談林攻撃がいたく俳壇を沸騰させ、當の相手の高政自身は、これに對して何等の返答をもしなかつたけれども、岡西惟中(別項)が先づ街津的な筆法を以て「誹諧破邪顯正返答(延寶八年刊)」を著し、高政に就いては隨流の非難を是として、却つて高政を難じ、師宗因を辯護した。これに對して重頼が「誹諧熊坂」を著して、誹曲の熊坂もちりて談林を論駁したらしく傳本不詳、これに應じて、當時高政派となつてゐた青木春澄が、同じ誹曲の賴政もちりの「誹諧賴政」を著して、本書及び「誹諧熊坂」の兩書に返答反駁した。これ等と同時に、或は續いて「誹諧熊坂」の返答書の「誹諧源氏供養」や、同じく談林派の著らしい「あつかひ草」(以上二書傳本不詳)や歌人金勝慶安の著と傳へられ、高政と隨流との訴狀に擬した趣向を立て、「中庸姿」を批判しながら中立の態度を取つた二つ歪などが現はれ、又談林派の著ながら却つて惟中の「誹諧破邪顯正返答」に附した獨吟百韻を非難した「行事板」が現はれた。惟中は直ちにこれに應じて、「俳諧破評判之返答百韻」を著して、自ら獨吟百韻に註解を附すると共に、「行事板」を反駁した。隨流は暫く沈黙を守つて形勢を見てゐたらしいが、以上の書などの出たのを見ずまして、隨流の門人の瀧川隨有が「誹諧猿轡」を著して、惟中の「誹諧破邪顯正返答」に附した獨吟百韻を攻撃したのである。これに續いて、「破邪顯正並にその返答の評判」と名乗つて、中立の立場に立ちながら實は貞門に有利な論をなした「俳諧殺巻」が現はれた。以上本書の現はれた延寶七年十二月から翌八年四月頃までの間に、上述のやうな論争書が續々と現はれ、或は隨流乃至貞門を擁護し、或は惟中乃至談林を是認し、或は第三者の地

としてゐることが、元祿六年の去來の書簡中に本書のことを云つてゐるのと矛盾する。この二事から云つても、坤の巻の性質がどんなものであるかは明白であらう。要するに本書は、信すべきものも採られてはゐるようけれど、改竄偽作を取つたものをも合せて、去來乃至卯七の記録の如く見せかけた作爲の書で、而も去來の記が卯七の記が判別しにくく如きものになつてゐるのである。

【参考】七部婆心録原田曲尊○芭蕉に關する參考書一斑(功)(芭蕉研究) (志田)

**俳諧獨稽古** (はいかいこ)

【著者】米樓川【成立】文政十年【刊行】文政十一年【由来】序・跋によると、本書成稿の後、或る人に勸められて上木を思ひ立ち、文政十年秋の二世伽羅庵麻中の序を得、文政十一年亥亥に自ら漢文跋を書いて剞劂に附したのである。【諸本】俳文學大系作法篇。外に付合作法全集(俳諧要庫)には上巻のみ所收。

【解説】俳諧の式法及び初心者就學の心得を説き、また四季その他の詞を寄せたものである。上巻には、俳諧の起原より始めて發句の切字、脇の韻字、第三の手廻波、四目目の輕み、七名八體のこと、賦物のこと、その他連句に關する諸般の事項を極めて平易に説き、下巻には、四季の詞、神祇・釋教・戀・無常・述懷並に懷舊・人倫・居所・夜分・山類・水邊・雜等の詞を寄せた。その詞寄の最初に掲げた四季之詞を見ると、春夏秋冬の四部を三月づつに分つて、それぞれの月に行はれる雅俗の歳事、當月の時候、草木禽獸等の名目を類聚し、その三月に互るものは、各季節の最初の月の詞を寄せた次に集めたのである。詞寄は凡て語義の解説は施さず、稀に附合上の注意を簡単に

はいかい(ひーぶ)

記すのみである。

【著者小傳】樓川は江戸の人、谷口樓川の養子、鶏口の門に遊び、二世樓川を嗣ぎ萬物庵・六々野人・木舞庵・二世貞松齋と號した。(各務)

**俳諧百一集** (はいかいひゃくいちしゅう)

【編者】尾崎康工【刊行】明和二年【内容】俳人二百人の肖像を畫き、その人の一句を題したもので、百人一句集即ち百一集の名の生じた所以である。各々諸書から取つた



短評を附してある。その俳人は、芭蕉・守武・宗鑑・翠一・貞徳・貞立・立圃・重頼・李吟・湖春・宗因・其角・見龍・嵐雪・去來・文章・涼菟・許六・北枝・野坡・素堂・尚白・杉風・信徳・鬼貫・言水・木因・一笑・任口・千那・木節・露川・萬子・秋之

坊・尼智月・浪化・正秀・越人・尼芳樹・野水・曾良・句空・凡兆・その友吉・李由・木導・二水・とよ・和及・重軌・すて・とめ・從吾・巴節・辨三・鬼士・左静・五竹・尼素心・淡々・詞鐘・合泉・春波・素風・杜菱・秋瓜・千代尼・尼珈彌・麻父・岸虎・禹洗・生可・左菊・鳥醉・夏太・見風・涼俗・晚九・也有・封卜・其竹・交琴・柳九・大阜・門瑟・麥水・卷阿・尼芳人・關更・可枝・注由・既白・馬明・或靜康工・柳居・盧元・希因・麥林の百人である。

**俳諧袋** (はいかいぶくろ)

【著者】大伴大江丸【刊行】享和元年二月【諸本】一茶大江丸全集(俳諧文庫)・中興俳諧文集(俳書大系)所收。【由来】本書編著の企てられたのは天明七年以前のこと、同年九月に歿した大鳥蓼太の序が附いてゐる。これが完成したのは板行と、同費で出版したのである。【内容】著者の俳話と著者の發句及びその周囲の人々の連句を集めたものである。俳話としては古今高名の人々の略傳を按じ、逸話を語り、又それ等の人々の俳論俳話を紹介し、或は師説を述べ、自己の俳歴を叙するなど、人及びその所説を主としてゐる。發句は凡て著者の吟で、これを他人の連句と併せ載せ、四季の順に類別して俳話と大凡交互に録してある。

伊勢派の人が比較的多いのは、康工の郷貫と流派とによるものであらう。その肖像は多く想像に基くものやうに考へられるから、これを以て直ちに史的證據とするのは考慮を要するが、併し又關東は總髮の姿であり、既白は僧體であるなど、疑問を解決し得るものもあつて、研究家に役立つ所が少くない。

【著者小傳】康工は越中戸出の人、通稱澤屋伊兵衛、八椿舎・六壁庵などの別號があつた。中川乙由門で、俳叢を善くした。安永八年歿す。享年七十九。編著は外に「俳諧金花傳」蕉句後拾遺がある。

【解説】本書は、知十のものした明治俳壇の批評的隨筆を集めたもので、俳諧風聞記・俳諧又聞記・俳諧露骨録の三篇を収めてゐる。「俳諧風聞記」は、明治二十八年九月毎日新聞に登載された明治俳壇に對する觀察で、即ち十千萬堂一派の談林風に始まつて、尾崎紅葉・櫻庭算村・角田竹次・正岡子規と日本派を批評し、連俳是非を説いたもの。「俳諧又聞記」は、二十八年十月十一日の「女學雜誌」に掲載されたもので、明治舊俳壇の觀察。「俳諧露骨録」は三十三年一月二日の人民新聞に登載されたもので、日本派及び秋聲會(各別項)に就いての時評である。以上の三篇は斷片的のものであるが、ほぼ維新以降俳進の推移變革の一斑が窺ひ得られるものである。



來。〔第十八編俳諧珍本集(大野酒竹校訂)立圖句集(立圖)梅翁宗因句集(宗因)〇兩時一日千句(西鶴)女書〇俳諧雜語(隨流)〇丙寅紀行(風濤)〇俳諧瓜作(野風)〇青すたれ(短久)〇新三百種(其川)〇のほり(厚合)〇節文集(里紅)〇俳諧古題(嘯山)〇春泥發句(維駒)〇京都獨吟集(寂布)〇花見次郎(升六)〇奇利風語(海通)〔第十九編俳諧文集(巖谷小波校訂)本朝文體(支考)〇和漢文操(支考)〇英書文集(耳傳)〇新撰俳諧文集(舟守)〔第二十編俳諧過話全集(鶴澤四丁校訂)滑稽太平記(浮生)〇行脚怪談(齊者不詳)〇菰翁淨息集(蘭更)〇俳家奇人談(安々々)〇續俳家奇人談(安々々)〇俳人百書撰(川柳)〇歌俳百人選(海壽)〇名家談(齊者不詳)〔第二十一編俳諧作法全集(伊藤松字校訂)韻のあゆみ(其角)作芭蕉評(其角)傳其角)〇二第辨(傳其角)〇俳諧附合小鏡(亞木)〇七名八物附合要録(梅人)〇手引(藤川)〇高眼集(清彦)〇遊よ手遺彦(淺川)〇俳諧手引(藤川)〇續繪歌仙(省渡)〇俳諧獨稿古(細川)〇俳諧道の便(月居)〇梅林茶談(梅宅)〇俳諧仕懐(是納)〇俳諧目録(常屋)〇燕門俳諧師院録(傳越人)〇七部集連句(見(杏三))〔第二十二編俳諧類題句集、前編(尾崎紅葉校訂)俳諧發句題(太師)〔第二十三編俳諧類題句集、後編(尾崎紅葉校訂)發句類(葉)〇新類題句集(蝶夢)〇類題發句集(蝶夢)〔第二十四編俳諧行全集(佐藤蘭人校訂)日本俳諧文集(三風)〇野崎紀行(櫻園抄)種梨園(〇奥細道(菅菰抄)梨一)〇奥細道拾遺(亞木)〇地の葉(才郎)〇阿彌千鳥(阿彌)〇摩詰庵(日記(雲錦))

【價值】古俳書の見難い時期に、これ集集成し刊行されたので、以後の俳諧研究者に便益を與へたことの尠少でなかつた事は云ふまでもない。併し本文の誤謬脱落があつたり、校正の嚴密を缺いてゐることは惜しむべき缺陷である。なほ史的研究の不十分であつた時期

はいから(ぼ)

のものだけに、今日からは作者及び俳書考證の方面に改訂さるべきものがある。この後、俳諧の叢書も次々に刊行され、單行書も種々現はれてゐるので、この叢書の價値は次第に減じ來つてゐる譯である。(志出)

俳諧發句題叢

【編者】青野太師

【刊行】文政三年

【諸本】俳諧類題句集前編(俳諧文集)所收

【解説】寶曆頃から當時までの俳人二千七十七人の四季の發句約一萬三千句を類題的に編次したもので、はいからい夫木鈔とも名づけぬべきかと、跋者成美は云つてゐる。卷首に國別の作者人名表を擧げ、各季に季題の總目錄を掲げ、集中にも作者に國所を附記するなど遺憾なきを期してゐる。この種類の發句集

の和文の序、成美の跋がある。【附説】蝶夢の安永三年刊「類題發句集」(別題)寶政四年刊「新類題發句集」が出て、類題的發句集の軌範を示し、これ等の集が初學者を益することの多大なるを、發句點取時代を來したとの相俟つて、この種の發句集が續出したのものを擧げ、その一つであるが、今同集以外のものを擧げ、〇俳諧發句題叢集 中本五册目錄一册(寛政十一年刊)一無庵丈左撰、晴奥南園、律大校倉。春夏秋冬各一册づつに分けて、當時の俳人の作を主に、まゝ古人の作を加へて類題的に編次した。編者丈左は母氏、京の人、江戸住、鳥明門といふ外、未考。〇新類林發句集 中本四册 周防史公編、浪舟自校。享和元年刊。石令の序中、「車蓋の俳諧題林集有てこたひ新類林發句集おこなはる」とあるが、この集は車蓋の俳諧發句題林集(寛政六年刊)に

繼ぐものではなくて、丈左の「題苑集」の改竄剽竊である。丈左のものは目錄を別冊にしてあるのを、この集はこれを各季各冊の初めに移したので、四季四冊となつてゐる。内容は各冊とも初めの一二枚を改竄しただけのものである。又「題苑集」冊尾にある四季則考之部を省いてあり、編者史公に就いては未考である。序者の石令に就いては、飯田篤老の假名である佐野石令と同人であるか否かも未考である。〇發句類集 中本二册 青野蘭下編、水島嘉壽松抄、文化四年刊。了輔は野村氏王子在の尾久に住し、藝太師であつた。人々の發句を書き留める事二十餘年、同門家松の刪定を経たが、主として雪門の作を集めたもので、雪門一派の句ふりを見るべきものである。了輔は八十二歳の高齡を重ねて天保七年十一月十四日歿した。〇近世發句類題集 半紙本四册 齋藤來會編、石津亮澄校。文政三年刊。文化以後の人々の四季發句を類題的に輯録したものである。編者來會に就いては未考である。【編者小傳】青野太師は下總香取の人、通稱慶次郎、猫頭庵迎風道人など號したが、椿丘の號が多く用ひられた。白雄門の奥州三春の人で、下總佐原にゐた今泉恒丸に學び、のち江戸へ出て門戸を構へ、晩年には越後の長岡にも草庵を構へて半年庵と號した。江戸と越後と半年交代の意である。文政七年五月十八日出羽の大塚村なる熊平亭古繁方で、一具庵夢南(其前名)に邂逅し、「過こしかたの物語に去年の辭をことしくやみ、昨日の謬をけふ驚き、六十一年の塵つもる頭の霜を拂ひ捨て」(寂砂子)たのである。成美、道彦、茶、一具、孤山(大庵)などと特に親しかつた。文政十一年八月十八日、長岡の半年庵に於て歿した。

享年六十五。本書の外、「太古今」寂砂子「俳諧發句題叢後篇」の編者がある。(發川)

俳諧發句帳

【撰者】野々口親重(立圖)

【刊行】寛永十年十一月一日(奥付)

【解説】春、夏、秋、冬の四部分に分つて貞徳派の發句を類集したもので、句數二千六百餘句を収めてゐる。玉海集追加(別項)の跋によつて、初め親重・重頼の二人が天文年中以來の發句附句を撰集して一集となすべきことを貞徳に懇望し、貞徳が遂に許して「天子草」といふ題號を與へたのを、重頼一人が私して「天子草」の草を集と改めて「天子集」(別項)を出版したのみならず、先賢たる親重の句は七十五句、重頼自身の句は百五十餘句を入れたので、親重がこれを憤つて四季四卷の句帳を作り、「天子集」の千五百句をも加へて二千六百餘句とし、重頼の句は元の儘の句數自己の句は増して三百句とし、古筆一村に清書せしめて開板したとあるが、この所傳は十分信するに足るのである(滑稽大書記)所傳は大部分誤りである。「天子集」は發句附句の集であるのを、親重は發句のみを集とし、「天子集」の發句の部の句數をその儘取つて、これに更に千句以上を増加したのである。その結果兩集を比べると、季節に於て、本集には僅かではあるが、「天子集」にはなかつた季節が増して居り、作者に於て、京の作者が遙かに増し、又「天子集」にはなかつた紀州の宗朋(千句)爲三(二包)が加へられてゐる。その他は伊勢山田の人が、却つて一人減じてゐる外移動がない。そして句數に於て千句以上を増してゐるのは、親重自身の句の外、貞徳の句を増して三百五句とすると共に、自己の門人を新たに加へ、或はその句數を増してゐることが主なる

原因をなしてゐるのである。即ち「天子集」にはなかつた幸和の句二百句を新たに加へ、「天子集」には、僅か三句に過ぎなかつた一村の句を百句としてゐる如きは就中著しい例で、この二人は共に親重の門人である。されば大部分の作者から云へば、その句には移動がないので、何分「天子集」が二三月頃出版されて十一月にはもう本集が出版されてゐるのであるから、自然かうあり得る譯でもあらう。要するに本集は「天子集」の發句の部と大部分その内容が重なり、又「天子集」と同年に出た貞門俳諧集の最も早いもの一つで、「天子集」及び十年後に出版した鷹嶺波集(別項)と共に、貞門初期の俳句を知るべき三部の集とも云ひ得るものである。

【参考】貞徳永代記中島薩越○維舟と立園との確執(原退蔵俳諧史の研究) (志田)

【俳諧萬人講】(はいかい) 雜俳集 一册

【刊行】寶永二年、大阪心齋橋筋柏原屋清右衛門【諸本】徳川文藝類聚雜俳第十一所收。

【解説】來山・伴自・一禮・園女・文十・何中・岸紫東行・甘泉・海音・文流・粵流・萬海・鷺水・言水・我黒・晩山・好春・雲山・鞭石等の高點句を收録した冠附・前句附の書である。(西原)

【註】付合作法全集(俳諧文庫)・俳文學大系作法篇に所收。【由来】自序に依ると、本文は或る人の請に任せ、童蒙のために依つて書かれたが、成稿の後、童蒙の請に應じて一々書寫して與へる不便を除くため、自費を以て梓行したのである。【解説】俳諧の附合上の用語を、その語の頭音によつて伊呂波順に排列し、註解を施したものである。例へば「伊」

の部に挙げられた語を見ると、「云捨三云掛」「體入」「いつつて留」「一句一直」「二巡」「一座一句物」「一字はね」「一字誦言」「二三附」「五文字」「五脇」「衣類」「飲食類」「韻字」の十六語で、「日」以下もこの程度の語を抄出してある。その註解は、諸抄物に出たり。しるすに及ばず」とか、「申すに及ばず」とかいふやうなものもあつて、やゝ簡略に従ひ過ぎた嫌がないではないが、大體に於て簡潔に要點を摘んでゐると思はれる。(各務)

【註】武玉川(はたがひ) 前句附集 十八編十八册【編者】第十五編までは慶紀逸

Table with 2 columns: Title and Page/Volume. Includes items like 主書昌 (廿五), 四時望樓 (廿五), 冬嶺秀孤松 (十五), 秋月明輝 (十五), 夏雲峯 (七), 春水 (五), 雁字三 (屯二).

【註】武玉川(はたがひ) 前句附集 十八編十八册【編者】第十五編までは慶紀逸以下は二世紀逸(四時樓)【名稱】第十一編から「俳諧燕都枝折」と改題した。【刊行】寛延三年に初編が出て以下順次刊行され、寶曆十一年に第十五編を出した。その後、十年を経て天明八年第十六編、安永二年第十七編、同五

年第十八編を出した。版元は第十編まで江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村勝三郎。「俳諧燕都枝折」と改題後は小石川傳通院前雁金屋儀助。【諸本】徳川文藝類聚第十一・川柳雜俳集(日本名者集)所收、外に抄録本もある。【解説】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樹」(別項)と同様な性質のものである。川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樹」とを比較對照して見ると、同吟類句が随分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、模倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に焼き直したやうな句の多いことは頗る注目し値ひする。(西原)

【註】俳諧名著文庫(はいかい) 叢書八册【編者】兼校訂者 榎山仁三郎(祥月)【角書】大正五年、俳書堂。【内容】古俳書の名著を一册づつ覆刻し(第六編だけは新編、殊に校訂の厳正を期したもので、校訂者は、原稿も亦みづから作りて筆耕生などの手に委することなく、時弊に鑑みて一字一句の末までも決しておろそかにせず)と斷つてゐる。各篇に校訂者の學書たる「校訂餘言」のある事は深切なり方で、便益となる點が尠くない。「去來抄」には、「向井家の系圖」と去來の遺墨」の一章が附せられて居り、「花屋日記」には「開業醫の立場から見た松尾芭蕉の死」(小池颯人)が附せられてゐて、これ等も研究家に取つて好い參考である。各册とも版を改める毎に前册の「校訂餘言」中の過誤を正してある如きも、校訂者の良心を窺ふべきである。所收書は次の如きものである。

第一編(去來) 第二編(去來) 第三編(去來) 第四編(去來) 第五編(去來) 第六編(去來) 第七編(去來) 第八編(去來) 第九編(去來) 第十編(去來) 第十一編(去來) 第十二編(去來) 第十三編(去來) 第十四編(去來) 第十五編(去來) 第十六編(去來) 第十七編(去來) 第十八編(去來)

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

とも版を改める毎に前册の「校訂餘言」中の過誤を正してある如きも、校訂者の良心を窺ふべきである。所收書は次の如きものである。第一編(去來) 第二編(去來) 第三編(去來) 第四編(去來) 第五編(去來) 第六編(去來) 第七編(去來) 第八編(去來) 第九編(去來) 第十編(去來) 第十一編(去來) 第十二編(去來) 第十三編(去來) 第十四編(去來) 第十五編(去來) 第十六編(去來) 第十七編(去來) 第十八編(去來)

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。

【註】俳諧問答(はいかい) 俳論 五册【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【原書】「青根が峰俳諧問答抄」で、「俳諧問答抄」が「峰問答抄」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」ともいふ。



許六輩の説く所にも耳を傾けて、それ等の説をも採つてゐる如き、本書は公正穩健な態度で書かれたものである。特に識見があり、その所論に卓越したところがあつて、俳論書中でも優れたものの一つである。

【著者志傳】積翠は甲斐守、旗本、中奥小姓で、初め燕志門、後太白堂二世桃隣門、享和三年七月四日歿す。「野ざらし紀行翠園抄」芭蕉句選年考(別項)「面問答」の著もある。(各務)

### 誹家大系圖

【本名】林正風 誹家大系圖【編者】生川春明【刊行】奥付に「天保九年戊戌四月彫成」とあるが、山崎よし故の後叙は「天保九年いぬの文月」とあるから、實際の出版は七月以後であらうと思はれる。【諸本】俳諧系譜逸話集、俳書大系、所収。「出来」序、跋等によると、俳諧の師傳が混雑して分ち難く、

正統を辨するにたやすからぬを患へて編者は古今俳家の眞蹟を集め、家々の秘事を探つて系譜三篇を編み、これを「誹家大系圖」と題して世に廣めることになり、先づその初編二冊を梓行したのが本書である。梓行に際し、春樓寫筆の序、及び自序、山崎よし故の後叙を附した。【解説】古風(別項)及び談林風(別項)の俳家の系圖を記したもので、守武・宗鑑(各別項)を俳諧權輿として略傳を掲げ、以下貞門の祖貞徳直弟の譜、貞徳直弟の中、立圃・重頼・貞室・金徳、西武・季吟・梅盛(各別項)の所謂貞門の七俳仙、その他貞徳の高弟の系譜、談林の祖宗因直弟の譜、宗因直弟の中、西鶴、由平、

露沾(各別項)等高弟を抽出してそれ等の系譜を記し、最後に三千風の譜を記してゐる。系譜は一般の系圖書きの如く鄧線を以て關係を表はし、それらの俳家の略傳並に家書等を註記した。編者はこの系譜を編むに數多の俳書を開し、巻頭の引用書目録に記されたものだけでも二百七十三部に及んでゐる。それ等の俳書中には、編者當時に在つても既に稀觀のものも少なくなく、原本が得難く孫引したのも四十四部ほどあるが、これは目録に特に孫引の旨を斷つてある。この一事からも推察せられる如く、編述の態度は頗る眞面目に考證的で、従つて本文の記事も殆ど正確といふを得べく、偶々發見せられる誤謬は、誰にも避け難き失誤乃至校合の際の過失に歸すべきものの如くである。巻首に守武・貞徳・西鶴宗

に記されてゐたものと思はれる。

### 俳家奇人談

【編者】竹内玄々【名稱】外題には「時代俳家奇人談」とある。【刊行】文化十三年秋【諸本】俳諧逸話全集(俳諧文庫)、俳人逸話紀行集(俳諧叢書)所収。「出来」序、跋によつて見ると、本書は「近世奇人傳」(別項)の例に倣つて俳家の奇行あるものを集録したのである。然るに刊行に至らずして編者が歿したので、男青々がこれを校正刊行し、青々述の「玄々居士略傳及び知友の追悼の詩・短歌・發句等を附録した。【解説】文明より安永に至る間の古今俳家八十餘名を傳してゐる。俳家の主なもの、宗祇、守武、宗鑑、貞徳、季吟、宗因、芭蕉を初めとして、貞門、談林、蕉風の高弟、孫弟等で、凡例によると「諸俳家集紀事・雜記の類、都て數百部」を参照したとあり、畫譜、短冊、尺牘等の茶寫や、蕙齋紹眞の筆に成る挿繪を挿んで、各俳家の面容を傳へることを期してゐる。記述は、大體初めに略傳を、次に奇行を述べ、その間にその作者の風調を見るべき作を掲げてゐる。但し奇行と云つても必ずしも常軌を逸した行爲ではなく、大體逸事ともいふべき程のものである。編述の態度として、その依據したものが時代の降るものや孫引と思はれるものがあるので、直に信用し難い點があり、誤謬をそのまゝ襲つてゐるものがある。特に逸事は逸事としての興味と共に、確否は一層注意を要する。また

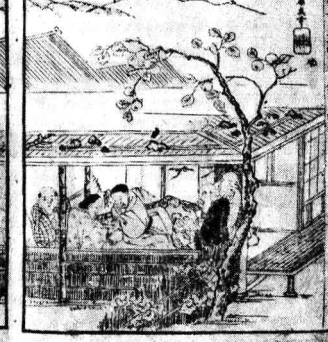
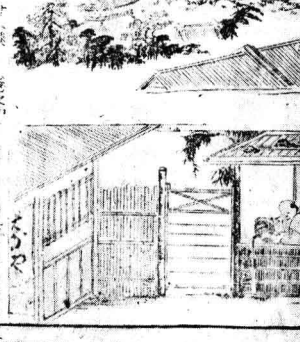
引用した諸俳家の俳句は「俳諧古選(別項)からの引用が多く、その點に於てこれも注意を要する。【附記】「俳家奇人談」が世に出て後十數年、天保三年秋、「續俳家奇人談」三冊が上梓せられた。編者は前編と同じく玄々」となつてゐる。



俳家大系圖卷四芭蕉

が、専ら筆を執つたのは青々である。前編刊行後續編を求める人のある儘に編者の遺稿を青々が編纂に取掛つたのであるが、業半ばにして青々も死去し、稿も行方知れずになつたのを、書肆が求め出して刊行することになり、寫松が補校したのである。前編の遺漏を補つたもので、上は宗長、竹相等から、蓼太、

に記されてゐたものと思はれる。



俳家奇人談挿畫(眞筆)

白雄・蘭更・曉豪・存義等の近代名家に至るまでを傳し、體裁は前編と同一であるが、これには挿繪がなく、眞蹟物も頗る少い。但し本編には、巻頭に蕪村の筆に成る荊門十哲の淡彩俳畫・畫像並に題句として、その發句一句づつが載せられてゐる。本編の價値性質は前編と同様である。

【著者小傳】玄々一は播磨の人、江戸住、初め吉田白馬門、後越谷吾山門。有無軒、竹窓と號し、勾當の官に進んだ。文化元年八月二十五日歿す。享年六十三。 (名譽)

梅花軒隨筆 四卷 【著者】梅花軒三休子 (本名未詳。江戸武家の隱士であらう) 【成立】卷末自跋の終に、「享保十一年丙午秋九月既望、梅花軒雅明叟命書五十五歲」とある。【解説】江戸時代前半期に武家、諸大名の間に起つた逸事や、又自身官府或は旅行中見聞の談話等を趣味的に記したもので、當時知名の侯伯などの評判もあり、まゝ武士の復讐談もある。いはゆる御當家史の一資料であらう。享保十一年春宵軒醉月(鳥居和陸)の漢文序、同年著者の和文序跋がある。 (和巴)

寶花新驛 一册 【作者】朱樂館主人(朱樂晉江) 【口繪】桃江畫 【名稱】易の書「梅花新易」のもちり、新驛は新しく開かれた驛の義、新宿の意をかけたのである。【刊行】安永六年 【諸本】徳川文藝類聚第五・洒落本代表作集(近代日本文學大系)・洒落本評釋所収。【題材】新宿遊廓が一度享保年間に廢止され、安永元年に再興を許されたのを、新奇の趣向を競ふ洒落本として取材したのである。

【挿繪】四谷あたりに、醉中庵風雜と云ふ俳諧師がある。その執筆に風非・風外の二人がある

た。或る日、四十男の嵐酒が定會の崩れに二十歳に足らぬ嵐興をそゝのかして新宿に出かける事になり、嵐外をも誘ふ。茶屋吳竹屋から枳坂屋へ上る。嵐酒は何かにつけて吉原の噂を聞かされたがる。嵐興ひとは妓に愛せられたが、嵐酒嵐外は冷遇されて、不平滿々で嵐興を起して歸つた。

【構想】半可通の生意氣で、新宿を馬鹿にする客はふられ、温順しい初心な客が厚遇されるといふ洒落本の類型的な描寫である。客と遊女との間は初期の洒落本に近い淡々たる描き方である。騾路風景の一節は特に新宿の郷土的特色を擧げさせる。その點がこの書の取柄である。【影響】「驛舎三友」(別項)の明かに本書の脱化である。人物の設定も兩者同じく、對話にも兩々相似た所がある。 (山崎)

梅花氷裂 三卷 【作者】山東京傳(孫書)歌川豊國(名稱) 詳しくは繪本梅花氷裂。作中の梅野與四兵衛小梅及び氷裂の鏡に因んだものである。【刊行】文化三年。

【挿繪】室町時代の初め、信濃の守護職小串貞行の忠臣唐妻浦右衛門は、妻棧との間に子がなかつたので、相談の上、家臣齋藤數右衛門の手を経て藻の花を妾とした。然るに高階直一の一族齋藤義太は、浦右衛門が主君と共に鎌倉に上つた留守中、奸計を以て棧と通じ、藻の花を懐殺して、共に家寶の錦藤四郎の名刀を奪ひ逐電した。この時藻の花の靈は亂巾の金魚と化して彼等に祟る。浦右衛門は鎌倉で藻の花の靈に遭つて怪しむ折柄、弟からの使者で事變を知り、數右衛門と共に妻敵討に出發したが、信州笛吹峠で義太に謀られて死し、數右衛門も鹽谷家の浪人粟野十郎左衛門

に討たれた。義太等は越後に逃れんとしたが途中賊のために名刀を奪はれた。こゝに泉州堺の十郎左衛門の浪宅では妻津洋が夫を案じて病となつたので、孝子長吉は水垢離を取つて平癒を祈り、井中から亂巾の金魚を得て大金にかへた。然るに信濃に於ける十郎左衛門の所行が報せられると、沖津は先夫の娘小梅の夫梅野與四兵衛は數右衛門の子であるから小梅と長吉は仇同士となつたと語り自殺した。一方浦右衛門の弟瀧次郎は玉骨の刀と氷裂の鏡を眞行から與へられ、僕油助を従へて仇討に出發し、武藏芝崎村與四兵衛方に到つて變を告げたが、與四兵衛が足痛に悩んでゐるので、彼を残して出立した。さて義太等は越後蒲葺峠に隠れ住んで悪事を働き、棧は奇病に罹つて金魚の狀を呈し、癒えて後も醜婦となつた。やがて義太は羽州男鹿山の兇賊蛇丸の山菜を陥れて賊主となつた。後を追つて來た棧は此處に殺され、その首は焔を吐いて中空に飛び去つた。その後與四兵衛は偶々研屋瑤助方に藤四郎の名刀を見てこれを得んと金策に出かけた留守中、長吉は巡禮姿で小梅を訪ねて來るが、小梅は名告らずに歸し、入れ違ひに與四兵衛が歸宅して金の調はぬを嘆いてゐると、其處へ行者姿の十郎左衛門が來て、藻の花の兄であること、義太と誤つて數右衛門を殺したことを語つて居腹した。與四兵衛は首を刎めるに忍びず、その笈を刺すと意外にも笈の中には長吉がゐて、母の死から父母のために與四兵衛の手に死なんと決心した由を告げ、五十兩の金を出した。小梅はその金で刀を買取つて來たが、それは贋物であつた。(後篇挿繪の豫告)棧の靈義太に報ふ事、小梅出産、玉骨・氷裂二寶器の靈驗、與

四兵衛夫婦瀧次郎を助け仇を討つ事、瀧次郎、與四兵衛の出世、葛飾郡小梅村梅堀の由來)。

【解説】作者自ら譚すところの迷意に、淨瑠璃・歌無伎から饜案し、支那小説の説話を混合して新たに作り設けたとある。梅野與四兵衛が長吉殺しの話は、元祿年間の事實で、「新著聞集」にも見え、また西澤一風の「傳奇作書」にも出てゐる。胡椒頭巾の強盜として知られた與四兵衛が、天王寺屋の小僧長吉を殺して百兩の金を奪つた事件である。これは元文三年原田由良・並末宗輔が「蕪野中隠井」(別項)といふ淨瑠璃に作り櫻竹座で演じたが、この梅の由兵衛を忠義者とし、長吉をその妻小梅と姉弟の關係に改め、忠義のために長吉を殺すといふやうに作つた。又歌舞伎で有名な寛政八年並末五瓶作の「隅田春妓女容性」(別項)の由兵衛の話に、小梅・長吉の再會の一件が加はつてゐるが、それは明和五年に上演された近松半二等の「傾城阿波の鳴門」のお弓の話に由來するものであらう。京傳はこれ等の有名なものに脚色を繕り、お家騒動と妻敵討の話を交へて、善は祭之惡は亡びるの趣向を取つたのである。併し「江戸作者部類」に言つてゐるやうに當時評判がよくなかつたらしく、後篇は豫告されたのみで未完に終つた。文政九年二世楚滿人は、これを補綴して柳川重山の畫を挿み、「物語後編 御梅花春水」(四卷)と題して出版してゐる。

【参考】近代小説史 藤岡作太郎

梅花無盡藏 七卷 【著者】萬里周九(一に集九に作る) 【名稱】著者の號、梅花道人に據る(周九参照) 【諸本】續群書類從所収。【解説】この集は、應仁以後の製作にかゝるものが多く、殊に旅行の見

ばいかけ ばいかわ

開應酬等は五山文學の末期の輕實眞率なる詩風を代表して居り、文藝として價値は少いが、作者の經歷交際等に依り、史料とせらるべきものが多し。一卷は七言絶句二百七十首、二卷は七言絶句二百八十首で、文明十七年九月、東遊して武蔵に入る途中日課の作、同十八年十月、江戸より鎌倉に至る途中日課の作、長享元年十月、江戸にかへり、あくる二年九月に至る作を収む。三卷上は七言絶句三百三十首で、長享二年九月、武蔵平澤を發し、越後府中に至る途中日課の作、同地方に滞留中の作、同年十一月、越後府中を發し、市場に至る途中日課の作、延徳元年四月、越後を發して越中に入り、西歸途中の諸作、同一三年、明應元・二・三年の作を収む。三卷下は七言絶句百八十四首で、明應三・四・五・六・七・八・九年、文應元年の作を収む。四卷は頌百四十七首、雜體數十首。五卷は七言律詩・五言律詩・五言絶句等二百數十首。六・七卷は雜文數十篇を収めてゐる。〔舊尾〕

**梅巖** がら 心學者〔姓名〕石田興長。通稱勘平〔生歿〕貞享二年九月十五日、丹波國桑田郡東縣村に生れ、延享元年（二四〇）九月二十四日京都に歿す。享年六十。〔墓所〕京都鳥邊山〔開歷〕父は淨心といひ、母は角氏であつたことだけが知られてゐる。二十三歳京にあつて、ある商家の徒弟となつたが當時より既に思ひを神道に潜め、ついで禪學に入つて僧了雲の提撕を受けた。四十歳の頃、郷里に母の病氣を看護してゐた時に、所用あつて扉を出ようとした瞬間に、忽然として頓悟し、更に上京後、日夜寢食を忘れて工夫すること一年餘にして大悟徹底し、己と天地とは同根にして、萬物は一體なるの理を會得し



石田梅巖（前參藏）

た。四十二三歳にして主家を退き、享保十四年四十五歳の時、車屋町通御池上の所東側に住んでそこに講筵を開いた。これが我が國心學別項講釋の濫觴であつた。その時表の柱に出した書付にいふ、「何月何日開講、席錢入不申候。無縁にても御望の方々は、無遠慮御通り御聞可被下候」と。世上の評判はまちまちで、陰で嗤ひ、明らさまに譏る者もないではなかつたが、その至誠は次第に貫徹して、門弟子は年と共に多くなつた。元文三年五十四歳の歳に、門下の五六人といふ馬の温泉に浴したが、同五年の冬、不作のために京中貧困に

陥る者多きを聞き、門人等を遣つて、實際を探らせた上、同年の暮より進んで米錢を施與して翌年に至つた。この事よりして梅巖を尊信する者は更に多きを加へ、京都以外に大阪へも赴き、河内國にも到つて講席を開いた。〔人物〕温厚篤實にして慈悲心深く、敬虔の念が厚かつた。自ら奉ずること薄く、常に簡易な自炊の生活に甘んじて、一生妻帯せず、門下を教導すること懇切丁寧を極め、一生を民衆の師として終つた。石門心學は、その祖梅巖の高潔な人格によつてその基が開かれたのである。心學參照。〔著述〕都鄙問答〇齊家論〇石田先生語錄各別項。

【參考】石田梅巖先生事蹟（心學叢書第六編の内）  
 〇梅巖と塔庵是立要圖（徳川三百年史中巻の内）  
 〇平民の師石田梅巖 大川周明 〇石門心學の研究 白石正邦 〔白石正〕

**俳句** はいく 〔名義〕俳諧の句といふと同じで、その縮約した語である。従つて元來は連句（狹義の俳諧の句及び發句を通じて用ひた語である。發句のみを指してゐる用例も見られるが、それはその場合、さう用ひただけである。俳句の語は、既に寛文三年の定清の「尾蠅集」に見え、天和三年の惟中の「あまの子のすさび」、同年の其角の「虛粟」（別項）に見え、降つては先來に「俳句探六帖」の如き書名があり、亦夢の「俳諧一串抄」（別項）は専らこの語を用ひて居り、江戸時代を通じて常に見られる用語ではあるが、一般的用語といふ程のものにはならなかつた。然るに明治に至つて、子規が日本派（別項）を起して、この語を専ら發句のみを意味する語として使ふやうになつてから、爾來一般的用語となり、發句といふ語は漸く用ひられざるに至つた。〔性質〕普通には五音・七音・五音の三句十七音の律格の短詩と説明されてゐる。然るに俳句は、源流たる連歌の發句以來、形式上の斷切と内容上の斷切と一致しないものもあるので、形式律・内容律の如く致して説明するのが便利である。形式律は五・七・五の十七音が基本律で、これに所謂字餘りも字足らずもある。そして形式律では、全句上斷切のあるものとなひものがあつて、斷切のあるものは、普通には初句の末か中句の末かにあつて、これが句切れと云はれ、この句切れに切字（別項）のある時とない時とがある。然るに形式上でも、句切れが初句末乃至中句末にはなく、全句の中間にある

ことがあつて、これを普通中間切れと云ふのである。これは形式律から云へば破格のもので云ひ得る。併しこの場合でも五・七・五音の三句の音感に感じ得るのであるから、破格は句法或は句切れ上の變化であつて、五・七・五音の音感律は、依然基本律として動かないと云へる。内容律では、形式上の句切れの所に内容上の斷切がある事となひ事とあつて、形式上、初句末乃至中句末に句切れのある場合、そこが内容上でも斷切になることが多いけれども、さうでない場合があり、形式上中間切れの場合は、内容上でも斷切になるのが普通である。例へば「鶉頭や松に並びの清閑寺」（其角）「風の箱根に澄むや伊豆の海」（太徳）の如きは、形式上では初句末や中句末が句切れになつてゐるが、内容上では「鶉頭や松に並びの」や「風の箱根に」に斷切があつて、形式上の句切れとは一致しない。併し「唐崎の松は花より臆にて」（芭蕉）「一行の雁や端山に月を印す」（兼好）の如き中間切れの場合は、内容上の斷切も、これに一致してゐるのが普通である。俳句は最短形式の短詩としての自然の發展上、想の飛躍單純化と表現の省略緊縮が行はれ、句切れ・切字に特殊の發達の見られると共に、俳句獨特の形態を具へるに至つた。それと共に、俳句には連歌の發句以來當季を結ぶべき慣例が起り、俳句時代に入つても、早くは俳諧連歌の系統の儘俳句も滑稽味のものであると共に、季を結ぶことも依然慣例的であつたのを、芭蕉に至つて革新され、眞面目な詩的な俳句となつて共に、季の俳句に對する關係も、作句に對して必然性を持つものとなつて全句の中核をなすものとなり、それが

又俳句の本質の基底をなすものとなり來つてゐる。季の入らぬ句は雜の句と云はれ、除外例のものとした。近來以上の制約を離れた俳句が起つたが、その或る派では詩と云つてゐる。

【沿革】發句は元來長連歌の第一句であるので、それが獨立しても詠まれるものとなつた時期はいつかが問題となる。發句の獨立は俳諧時代に入つてのことと認められ、宗鑑の「大筑波」(別項)の時代には獨立してゐたと認め得る。故に嚴格な意味に於ける俳句はこゝを先頭として考へ得るのであるが、併し連句(狹義の俳諧)の發句も、獨立の俳句と本質に於て異ならぬから同様に取扱はれて居り、また「大筑波」以前の俳諧連歌の發句も、同様の意味に於て俳句と認め得るから、これも俳句として取扱はれてゐる。

【貞門以前・貞門】室町後期の宗鑑・守武(各別項)の俳句及び江戸期に入つて貞徳が中興し、寛文頃を大成期とした貞門(別項)の俳句は、言語上の滑稽を主とした點に於て、大體同様の作風のものであつた。

まん丸に出で、も永き春日哉  
飛梅やかろくしくも神の春  
しをる、は何かあんずの花の色  
貞徳 守武

貞門には、例へば後の蕉風で賞された句の、  
これは(ミ)はかり花の吉野山 貞室  
の如き類のものもないではなかつたが、これ等は頗る稀なものであつた。併し又俳句の更新さるべき道程に立つものでもあつた。  
【談林】貞門の反動として宗因によつて開かれ、延寶頃を大成期とした談林(別項)の俳句は、同じく滑稽のものではあつたが、その滑稽がやゝ内容的になつた事と斬新奇抜を脱つ

た事とが特色である。従つて用語も自由に、又甚しい字餘りをも取つてした。  
松に藤明木にのほるけしきあり  
必ず友あり初陽うるほふ今この春  
園は花は見ぬ里もあり今日の月  
みつがしら鞠なくなりくわい  
くわい

内容的になり來つた談林には、  
菜の花や一本咲きし松のもと  
の如き句がやゝ見られ、談林一體としてもこの種の句が見られるやうになり、愈々次の蕉風(別項)への道程を進め來つた。かくなり來つたのは既に時代でもあつたので、芭蕉よりは先輩又は同輩に當る貞門乃至談林の系統の人々の中に、蕉風式な傾向を取る人々が現はれた。貞門系統の信徳・素堂・鬼貫・言水、談林系統の才磨・來山などがそれである。特に鬼貫は伊丹風(別項)を確立した人として注意される。當時又仙臺に三千風がゐたが、これは怪奇な文字を弄する醜怪な談林風であつた。

【蕉風・蕉風荒蕪】貞門・談林を経た芭蕉は、獨り能く眞に俳句の革新に成功し、滑稽を擺脫した幽玄閑寂の蕉風(別項)を開き、元祿頃をその大成期たらしめた。  
古池や蛙飛び込む水の音  
芭蕉

の句は、その眞の開眼の句であると共に、蕉風として又俳句として芭蕉の所謂不易の句である。芭蕉の門人は所謂「蕉門十哲(別項)」を初め多士濟々であつたが、芭蕉の歿後は高弟が分裂し、その個性の俳風を進める者もあつた。其角の洒落風、支考の濃麗風、涼菟・乙由の伊勢風(各別項)の如きがそれであり、洒落風は露沾問の活徳に繼がれた傍ら、門人湖十の浮世風や淡々の浪花振となり、不卜門の不角の

化鳥風(別項)と對峙したが、活徳からはその門人沾洲の比喩體(別項)が生じた。これ等は各々その個性によつて蕉風を變改し荒蕪せしめたもので、その俳句もさうしたものであり、以後の俳風、俳句をして益々荒蕪に歸せしめたものである。一方風雪の雪門、杉風の二門(後の探茶庵派、桃隣の二門後の太自堂派)、それに許六の所謂彦根體等があり、傍ら素堂の葛飾派(別項)があつて、後の探茶庵派では、素堂・風雪・杉風・桃隣の四人を江戸の四大家と併稱したやうに、これ等のものは穩健な俳風であつたけれども、而も自然の低下を進めるのみであつた。

日本の本風呂吹さいへ比叡山  
群喧はね旅人はなし桃の花  
芦の葉のさらばはくや九月盡  
浮草や今朝はあちらの岸に咲く  
ついでて腰よみの鐘や花の蔭  
梅折ればおのれも動く月夜哉  
六月の晦日家越のほらひ哉  
初雪や若葉のうへの眼玉  
享保頃は其角系統が愈々點取俳諧となり、跋扈を極めたので、杉風門の宗瑞・蓮之、雪門の咫尺、葛飾派の素丸、活徳門ながら點取俳諧を肩しとなかつた長水の五人が、其角門ながら人格者であつた隠者俳人祇空を後見として、反抗的廓清運動の「五色藍(別項)」を試みたのであつたが、併し大勢を動かす効果を擧げ得なかつたのは、一は作の力の伴はないためであつた。

【天明復興・荒蕪】俳壇全般のうち、或は奇怪な調を弄し、或は平俗に流れた諸派が、漸く活氣を失つて歩み寄り、一律に卑近な調のものとなり來ると共に、そこから反動的に復興の兆も生じて來た。其角・風雪門たる巴人門の蕪村・雪門三世の琴太・伊勢派の麥水・蘭更・二柳・櫻良・白雄、美濃派の曉臺・青蘿等は、復興更新の雄なる人々で、これ等の一人は、大體芭蕉晩期の閑寂枯淡な俳調よりも芭蕉草期の壯麗な俳調を目標として、安永・天明の復興俳壇の中堅となつたのである。  
時鳥平安城をすざかに  
五月雨や或夜ひそかに松の月  
行く秋や露ぬけの塔を散る木の葉  
枯芦の日に折れて流れけり  
わがなしや海苔に纏はるうづせ貝  
我が庵は覆はかりの落葉哉  
夕汐や即ぐれに魚わか  
曉や鯉の鳴ゆる霜の海  
風の蝶消えては姿にあらはる

以上復興諸傑にはそれ／＼優秀な門人があつて、中には師に劣らない人々があり、その他にもこれに化せられた優秀な人々があつて、寛政から文化・文政に亘つては、なほ能く前代の俳風を繼承し得てゐる。謂はゆる寛政三大家奥羽四天王(各別項)と呼ばれる人々々は、當時の俳壇に於ける巨匠であつた。又この時、一種特別な存在の一茶も現はれた。併しその守成は活力に乏しく、その間に自然荒蕪低下の傾向も孕まれてゐた。かくて天保に至つては、所謂「天保四老人(別項)」と稱せられる梅室・蒼虬・風朗・卓池の如き、頗る聲望があつたが、俳句そのものは低劣俗化の極に達し、かゝる情勢のまゝで明治時代に入つたのである。  
萩の花一本折れば皆動く  
百合切つて並べて藤くや草の上  
名月の雨さへたぐひなかりけり  
鉢印夜毎聞くほど老いにけり  
梅室 蒼虬 風朗 卓池